

2013/
平成 25 年 1 月 17 日

曹洞宗 龍昌寺
住職 清水 誠勝 様

財団法人岩手県青少年会館
理事長 佐藤 光保



キズナ強化プロジェクトに係る講義並びに保育園の訪問について

拝啓 厳寒の候、貴職におかれましてはますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

日頃より青少年の健全育成活動に深いご理解、ご支援を賜りまして厚く御礼申し上げます。

さて、当財団では日本政府が実施しております「アジア大洋州地域及び北米地域との青少年交流」キズナ強化プロジェクト事業を受託し取組んでおりますが、2月におきまして、招聘されるモンゴル国、ナウル共和国の大学生 63 名程が岩手県内の学生と交流を予定致しております。被災地を訪問して交流やボランティア活動等を行い被災・復興経験を共有しながら日本が再生に向けて力強く展開している様子や日本各地の魅力を海外に発信することを促し、日本への風評払拭、被災地と各国との絆を強めることを目的としております。

つきましては、お忙しいところ恐縮でございますが、訪日団の研修目的でもございます被災地での交流と被災体験などの様子をご講義賜りますようお願い申し上げます。

敬具

記

- 1、訪問日時 平成 25 年 2 月 12 日火曜日 午前 9 時半から 13 時半頃まで
- 2、講義会場 龍昌寺
- 3、招聘青年 国名：モンゴル国大学生、ナウル共和国大学生
- 4、研修目的 被災体験等についての講義、第一保育園児との交流
- 5、訪問人数 大学生 59 名、モンゴル通訳 4 名、英語通訳 2 名、日本国際協力センター 1 名、岩手県青少年会館 1 名 計 67 名予定
- 6、添付資料 事業概要、プログラム日程（案）

担当：(財)岩手県青少年会館

事務局長 鈴木 雅雄 ☎019-641-4550 mail：jskmasao@iwate-sk.com

キズナ強化プロジェクト「モンゴル、ナウル学生」受入れに係るプログラム



事業受託団体/財団法人岩手県青少年会館

- ・国地域名:モンゴル学生 40名、ナウル共和国学生19名
- ・人数/59名 6泊7日
- ・引率指導者/JICE5名、JOCA1名、JICE事務局1名
- ・事業受託団体/岩手県青少年会館

日数	開始時間	プログラム内容
1	2月10日 (日)	<p>移動 東京⇒盛岡ノはやて25号 東京駅11時56分発 盛岡駅14時22分着</p> <p>14:50 移動 宿泊先 岩手県青少年会館へ</p> <p>15:15 宿舎着</p> <p>16:00 被災地訪問プログラムオリエンテーション(現地関係者の紹介等)</p> <p>18:00 宿舎仕様(避難経路等の説明)</p> <p>18:30 夕食 入浴</p> <p>宿泊先:岩手県青少年会館</p>
2	2月11日 (月)	<p>6:00 朝食</p> <p>6:30 移動 盛岡市⇒宮古市田老町(所要時間3時間30分、休憩含み) 田老防潮堤視察、講義</p> <p>10:30 震災語り部ノ 宮古市観光協会手配者 ☎0193-77-3305(澤口様、局長山口様) ガイド専用携帯電話 080-5739-6423 ガイド料@4,000×2人</p> <p>研修後移動</p>
		<p>12:30 昼食 宮古浄土ヶ浜レストハウス</p> <p>13:30 震災語り部ノ 宮古浄土ヶ浜レストハウス主任 島崎 準 氏 電話0193-62-1179</p> <p>14:30 移動 浄土ヶ浜レストハウス⇒休暇村陸中宮古</p> <p>15:00 宿舎着 ワークショップ 龍昌寺、第一保育園への応援グッズ作成</p> <p>18:30 夕食 入浴</p> <p>宿泊先:休暇村陸中宮古 電話 0193-62-9911(中田) 部屋予約数ノ和室4人×16室、洋室×9室(バス運転手3人含む)</p>
3	2月12日 (火)	<p>7:00 朝食</p> <p>8:15 移動 宿舎 ⇒ 山田町龍昌寺(所要時間50分)</p> <p>9:30 龍昌寺訪問 住職:清水誠勝 氏 ☎0193-82-3089 震災語り部ノ第一保育所園長 阿部哲雄 氏 (バス駐車場は山田町役場ノご担当:企画財政課斉藤 様0193-82-3111) 講義終了後、龍昌寺第一保育園を訪問し園児との交流</p>
		<p>12:00 龍昌寺にて昼食</p> <p>13:30 移動 山田町⇒青少年会館</p> <p>16:00 道の駅休憩</p> <p>17:40 宿舎着 青少年会館</p> <p>18:30 夕食</p> <p>宿泊先:岩手県青少年会館</p>

4	2月13日 (水)	7:30 朝食
		9:30 講義 仮題「岩手の復興と未来」(自治体の取り組みについて学ぶ) 講師/岩手県復興局企画課 担当 北島 太郎 氏 電話629-6945 講義会場:岩手県青少年会館
5	2月14日 (木)	12:00 昼食 岩手県青少年会館
		13:30 グループ別ワークショップ モンゴル国3G~4G、ナウル共和国2G 17:30 夕食 18:00 夕食 宿泊先:岩手県青少年会館
6	2月15日 (金)	7:30 朝食
		8:30 ナウル大学生帰国予定(大学生19名、通訳2名計21名) モンゴル ワークショップ アクションプラン作成
7	2月16日 (土)	12:00 昼食 13:30 講義「桜ライン311活動」について 講師:NPO法人桜ライン311 代表 橋詰 琢見 氏 090-1491-5866 15:00 ワークショップ 不來方高校との交流に向けて発表内容のまとめ 18:00 夕食
		7:00 朝食 8:00 移動 宿舎⇒岩手県立不來方高校訪問 8:45 学校交流/帰国後のアクション発表会
7	2月16日 (土)	12:00 不來方高校学生と昼食交流会(案) 13:30 宿舎へ移動 14:00 奉仕活動 19:00 夕食 個別配膳(他団体50名宿泊) 20:00 入浴 宿泊先:岩手県青少年会館
		8:00 朝食 個別配膳 9:00 移動 宿舎⇒小岩井農場 震災後の岩手の地域産業を探る 講師/小岩井農場まきば園 部長 戸田 敦 氏 11:30 昼食 13:00 移動 小岩井農場⇒盛岡駅 14:00 移動 盛岡⇒東京/はやて28号 盛岡駅14時41分発 東京駅17時08分着

プログラム活動写真



【キズナ強化プロジェクト招へい事業参加者の声】

1. 日本人の生きていくという決意を感じ取ることができた

(アメリカ高校生)



被災地を訪問して最も衝撃を受けたのは、すべての物があらぬところにあったということです。建物の中に車があったり、ボートが丘の上に乗上げていたり、人々が家から押し出されていたり。特に市役所の建物を見た時のショックはとても大きいものでした。つぶれた車が建物の中に残され、祭壇が正面に設置され、亡くなった方の遺体が見つかった場所にXの印がついているという説明を受けました。

アメリカに帰ったら、以前より災害のための準備が行き届いていたこと、そして震災後の早めの対応が功を奏し、日本人は質の高い生活を維持できていると伝えたいと思います。商売は活気を取り戻し、仮設住宅が建てられ、新しい建物が建設されている現場を見ました。そして日本人の生きていくという決意を感じ取ることができました。アメリカがこの災害に対してできる限りの支援ができることを期待します。

2. 悲劇が起きないように、防災や環境などについて呼びかけていきたい

(台湾高校生)

あの震災から一年半が過ぎた被災地ですが、やはりまだ悲しみに包まれていると感じました。被災地で学んだことや、日本がこの一年半でどう変わったかなど、全てのことを台湾の家族や友人、同級生の人みんなに伝えたいです。そして、台湾に帰ったら、もう二度と 3.11 のような悲劇が起きないように、防災、環境保全の意識や、政策を強化することを、自分は小さな力ではありますが、呼びかけていきたいです。

3. 甚大な被害を目の当たりにして、命の尊さや絆の大切さを身にしみて感じた

(中国青年)



甚大な被害を目の当たりにして、命の尊さや絆の大切さを身にしみて感じた。災害後の経過について、日本政府、地方の各界、地元の人たちの不屈の精神や強い意志力。そして困難に立ち向かう熱意で美しい故郷を再建するために奮闘を重ねているところである。1年半という時間は決して長くはない。家族を失い、経済的に大きな損失を被った悲しみから抜け出せない人もいるであろう。しかし、彼らの復興への歩みは、

止まることはない。8年計画を策定し、一步一步実現に向かって進んでいる。しかも一定の成果が表れており、成功例も多い。このように大きな被害状況を目にして、我々を迎えてくれた

別紙

方たちの誰もが親切で、温かく、優しくかった。あんなにも真面目に語り、細かく考え、資料も十分に用意して、細部にわたるまで適切な手配を行い、大地震と津波の発生の過程から、成功した経験と教訓、ありのままに漏れなく提示し、皆と一緒に総括と理解をさせることで、将来起こる災害に備えさせようとしてくれたのだ。彼らの心は熱く、人類共通の愛があれば、明日はもっと素晴らしい日になるに違いない。岩手県及び各被災地の皆さんが一日も早く美しい故郷を再建できるように願う。

4. 日本という国は大変な災難をも克服していける底力を持った国

(韓国大学生)

昨年3月の東日本大震災発生以降、韓国では日本に対する悲観的な見方が多くありました。しかし実際こちらに来てみて、日本という国は大変な災難をも立派に克服していける底力を持った国だということを知りました。



津波でまるごと流された町を今でも守り続け、生活を営む地域の漁業関係者の方々、自然災害によるエネルギー不足の解消や、地元農家の生計のために奮闘する地元企業の社長や社員の方々、観光産業の復興と省エネに取り組むメタンガス発電所の関係者および地域住民の地道な取り組みと切実感こそが、日本を危機から救い、復興を進めるのに最も大切な役割を担うものだと思います。

日本人にあって韓国人に欠けている「地域愛」の心を、韓国に帰ったら強く訴えたいと思います。一方、津波によって被害を受けた地域も徐々に本来の美しい姿を取り戻しつつあり、ネット上で騒がれているほど日本が危険な国ではないということも、伝えていきたいです。最後に、被災地の方々の努力が実を結び、復興という切実な願いが、必ずや叶えられることを願っています。

5. 震災からの復興の鍵は、日本人の『団結と勤勉』

(クック諸島学生)



被災地プログラムで最も印象に残ったのは、地震や津波で非常に大きな被害を受けたにも関わらず、日本の皆さんが家族や町、国として一致団結し、復興への努力をしていることです。

この事実を知り、私は日本人をより尊敬するようになりました。震災からの復興の鍵は、日本人の『団結と勤勉』であると思います。

私は帰国後、「日本人は精神的にも肉体的にも強い」と伝えたいと思います。母親が何日も子供に会えずにいたこと、50日以上も住む家が無かった人のこと。何もかもを失った被災地で、また家を建て直し、失った記憶を呼び戻して新たな思い出を作るため、友人や近所の人々と協力し合っている皆さんのことを伝えたいと思います。

日本の方々、自らの力で地震と津波を乗り越えました。日本人は、震災で被災し、かつそれを乗り越えた国民でもあります。私は日本を尊敬します。復興への取り組みが確実に進んで

いることを私の故郷の人々が知れば、彼らもきっと日本人を尊敬すると思います。

6. 日本人の『他者の境遇を思いやり、互いに励まし合う心』を伝えたい

(ミクロネシア学生)



被災地に着いた時、そこで地震と津波による傷跡を見て、非常に大きなショックを受けました。どれだけの被害があったのかをデータとして知ってはいましたが、実際にそれを目の当たりにするのは、全く別のことでした。いくつもの瓦礫の山を目にしました。地元の人々がどのような経験をしたのかと考えると、打ちのめされる思いでした。

しかし、実際の体験を聞くうちに、そのような辛い経験を話してくれる人たちの勇敢さに感銘を受けました。地域の人々が復興に向けてどれほど頑張っているかがわかり、感動しました。自分の国に伝えたい教訓の一つは、他の人の境遇を思いやり、互いに励まし合わなければならないということです。

また、いつ、どんな時にも起こり得る状況に備え、より良い未来をつくるために、私たちは一つになって努力しなくてはならないということも伝えたいと思います。

7. 日本は訪問するに値する、安全で魅力的な国

(インドネシア高校生)

3.11 から1年が経過しましたが、震災に屈しない日本人の忍耐強さに、敬意の念を抱いています。『日本は訪問するに値する、とても安全で魅力的な国である』ことを、また、『一部のメディアによる被災地に関する噂には、偏りが見られ信憑性を欠くものもある』ということも、帰国後に家族や隣人、友人達に知らせたいと思います。

日本の自然は本当に美しく、伝統文化にも興味を掻きたてられました。そして何と言っても、震災で混乱している現場で、窃盗などの犯罪が発生しなかったことは驚きであり、日本人の高い道徳心と倫理観もうかがい知ることができました。

8. 風評被害払拭を応援して、日本人から団結の素晴らしさを学ぼう

(ベトナム高校生)



被災地に訪れて、私は被災や復興の状況が良く分かりました。訪問地は津波を直接受けることはありませんでしたが、農産物の放射性物質汚染について、根拠のない風評にさらされていました。現在、訪問地で生産された全ての農産物が、出荷前に放射性物質の検査をされていると学びました。また、その放射性物質の基準値も、他の国より大変厳しく設定されている事も知りました。

今回の訪問で、一番印象に残ったことは、日本人の規律性でした。災害時は互いに助け合い、大変な状況の中においても、混乱を招くことなくきちんと列を作り、何時も冷静でした。そのお

かげで復興事業も早く進んだのだと思います。

帰国後、私は周りの人に、被災地の復興状況と、人々が団結する事の重要性をアピールしたいです。そして、ベトナムの人々に、こう伝えたいです。

『風評被害払拭を応援して、日本人から団結の素晴らしさを学ぼう』

9. 被災地で現状を見て学び、それを国で伝えるという責任を果たしたい

(モンゴル高校生)

福島原子力発電所事故とその影響、また被災地の雰囲気について。来日前の私たちは、不十分で間違った情報を得ていました。私は、被災地で現状を見て学び、それを国の人々に伝えるため、日本へ来ました。そして、その責任を果たしたいと思います。日本の人々は辛く困難な時を共に乗り越え、負けずに戦い、成功に向かって一歩ずつ階段を上り、幸せを築き上げるといふ見習うべき人々なのです。

10. 行政や日本国民の積極的な働きについて、ラオスの人々に伝えたい

(ラオス高校生)

講義と現場での体験を通して、政府や地方自治体の行政が、被災した方々のことを考慮して、様々な災害に備え、防災知識を提供する政策をとっていることを知りました。

また、日本の全ての国民が、責任感を持って積極的に働いていることに感動しました。国内外の観光客のために、日本の素晴らしくて美しい、魅力的な環境、訪れた人々がまた戻りたくなるような環境を整えようと努力しています。

このような深刻な大災害が起りましたが、私が学んだ知識や体験をラオスの人々に伝えようと考えています。

11. 日々の生活の中で大切にされている『絆』

(マレーシア高校生)

日本滞在中、多くのことを学びました。強く印象に残ったことの1つは、日本人が生活の中で『絆』をととても大事にしているということです。日本人が、自分の命を危険に晒してでも、他人を救おうとしたという話に感動しました。

そして、被災地の復興に向けた日本人の努力です。自身が悲惨な状況にあっても、他の地域に対する援助を惜しまなかったということです。また、日本では清潔であることが大切にされています。

私が日本で学んだこれら全てを、自国に戻ってから必ず伝えたいと思っています。他にも例えば、今回訪問した被災地の放射線による影響は、他の国と比べても低いということ、(品質管理が徹底されているため)日本で口にする食料や飲料は安全であるということ、そして、日本の人々による防災への考え方や取り組みについて伝えたいと思います。

12. 防災センターで得た知識を広めたい

(タイ高校生)



今回の震災で、被災地をはじめ日本は多大な被害を受けました。しかし、日本の方々はその経験から学び、大変な時期を乗り越えて、今日までやってきました。

私は被災地を訪問して、あれほど大きな被害を受けたにも関わらず、まるで何事もなかったかのように、迅速に復興している様子をこの目で見て、非常に驚きました。

タイに帰国して1番にしたいと考えていることは、防災センターで得た知識を学校の友達に広めることです。

その他にも、日本で感動したことや日本人の考え方を、自分の学校生活や日常生活に生かしたいと思います。

13. 帰国後も、被災地の復興を応援する韓国人でいたい

(韓国中学生)

講義を通じて、被災地についての基本的な情報を得ていましたが、直接被災地を訪問し、地盤沈下した家屋や車庫などを見て、私にもその痛みが伝わってきました。

被災地の復興のため、明るく力いっぱい暮らしている住民の方々を、すごいと思いました。「復旧」ではなく「復興」という、より肯定的な言葉を使い、頑張っている日本人の方々の精神力は、どんな災難であっても克服できるように思えました。

また、公園でボランティア活動をしている私たちのために、暑い日であったにもかかわらず、地域の方が舟を漕いでくださったことに、感動しました。

前向きで良心的、思慮深く、慎み深い日本人だからこそ、1年半が過ぎた今、特定の場所以外はもう被災地だと思えないほどの、早い復興を成し遂げたのではないかと思います。

今回の訪問を通じて、日本人の精神力に感動しました。そういった気持ちを帰国後、広く伝えたいと思います。私たちがしたのは小さなお手伝いにすぎませんが、この訪問が被災地域の方々にとって、大きな力になってくれたらと願います。たくさんの感動を与えてくれた訪問でした。帰国後も、被災地の復興を応援する韓国人でいたいと思います。

以上

訪日団アンケート抜粋

- 今回は初めての訪日ですが日本は私の好きな国の一つです。日本の文化特にアニメのすばらしさにいつも感嘆しています。

率直なところ今まで日本の津波災害がどんなものか知りませんでした。しかし田老地区及び山田町を訪れ津波被害のすさまじい力についてよく理解できました。私は津波の強大な力と高さにショックを受けました。

次に感心したことは講義や視察を通して示された確かな復興の兆候です。まだ多くの空き地が残っているものの、がれきはきちんと効率的に片付けられていました。

最後に私が最も感激したことは、ひどい災害にあったにもかかわらず日本は今もなお本当に美しい国であることです。美しい風景や清潔な街並みはすばらしいです。凍りそうに寒い気候だったけれど私は日本が大好きです。そしてなぜ風評被害を信じる人々がいるのか理解できない。彼らは日本の被災地に来て自分たちの目で見れば必ず考えを変えようと思うのです。(ナウル訪日団)
- 被災地を訪問して私が一番心を打たれたことは多くの命が失われ家が崩壊したことです。日本が経験した悲しみについて私の家族、友人、近隣の人々に伝えたいと思います。被災地の人々の暮らしや恐怖の状況についても話すつもりです。しかし一番大切なことは前に進もうとする日本人の力強さと以前の暮らしに戻ろうと互いに助け合う人々の姿だと思います。(ナウル訪日団)
- 私が家族や友人達に伝えたいことは命の大切さと安全ということです。何かしら頼れるものがあったとしても私たちは常に災害に対する備えを忘れず、できるだけすばやく行動を取らなければなりません。何が起きても最後には私たちの心に常に勇気と希望があるのだということを学びました。

ナウルの人々に私たちが経験したことが無い厳しい状況に苦しんでいる国々があるということを伝えたいと思います。私たちは常に何事にも油断せず用心しなければなりません。百聞は一見にしかずで防災の意識を持つことの重要性を学んだ今、今後何が起きても備える準備と何をすべきかを考えておかねばなりません。(ナウル訪日団)
- 私が家族や友人達に伝えたいことは命の大切さと安全ということです。何かしら頼れるものがあったとしても私たちは常に災害に対する備えを忘れず、できるだけすばやく行動を取らなければなりません。何が起きても最後には私たちの心に常に勇気と希望があるのだということを学びました。

ナウルの人々に私たちが経験したことが無い厳しい状況に苦しんでいる国々があるということを伝えたいと思います。私たちは常に何事にも油断せず用心しなければなりません。百聞は一見にしかずで防災の意識を持つことの重要性を学んだ今、今後何が起きても備える準備と何をすべきかを考えておかねばなりません。(モンゴル A グループ)

- 被災地訪問および震災講話、講義のすべてが強く心に残った。日本の人々の勇気、忍耐強さ、故郷を思う気持ちに感銘を受けた。私は帰国後、自分が知り得たことすべてを人々に伝えたいと思う。グループごとにそれぞれのアクションプランを作成し、それぞれの活動を行っていくことになるが、最終的には日本で起こった自然災害についての正確な情報を伝え、誤った理解を正し、日本の人々を応援することを目指している。同時に、モンゴル 3 陣のみならず、以前に来日した陣の学生やこのプログラムに参加した他の国々の学生たちと交流し、協力して活動することによってよりよい成果が期待できると思う。私たちは日本の皆さんの信頼を裏切ることなく、最も効果的な方法や計画に基づいて活動を実施していきたい。(モンゴル A グループ)
- 1. 日本の人々の心の強さが何よりも心に残った。2011 年 3 月 11 日の震災が人々の家族や親しい人々、住む家を奪ったとしても、人々は震災をきっかけに自分をより大きく成長させ、海を憎むことなく、変わらず海とともに生き、故郷を取り戻そうと日々努力していることが素晴らしいと思った。
 2. 震災の翌日からがれきを取り除き、次の災害に向けてさらにしっかりした備えを始めていることが素晴らしいと思った。来日前は日本を訪れ学ぶことに多少の恐れを感じていたが、このプログラムに参加して政府や自治体が国民、住民を災害から守るためにいかに優れた取り組みを行っているかを聞き、知ったことでそのような恐れはなくなった。
 3. 幼児から高齢者までが自国の現状を世界に知らせるための活動に取り組んでいることがとても印象的であった。そのような人々の努力を無駄にしないためにも最大限努力したいと思う。
(モンゴル A グループ)
- 被災地に行き、復興の様子や被害の大きさがいかにひどかったかを実際に見て、日本の人々の心は何て我慢強いのかという印象が残りました。災害が起きた時、自分の身を守ることが何よりも重要な問題であり、その上で他人を救助することができれば、被害を最小限に食い止めることができるということを学びました。日本人は、今回の災害がどんなにひどかったにもかかわらず、日常生活を再び取り戻すために一生懸命努力し、強い心を持った人々です。彼らのためには外国の人々の正しい理解が必要だということが分かりました。帰国後、日本についての間違った考えを断ち切るように多くの人に働きかけたいと思います。日本で学ぶことや、日本と協力することに二の足を踏んでいる人々に、正しい実情を伝えることで日本の人々の復興の歩みに少しでも貢献したいと思っています。(モンゴル B グループ)
- キズナ強化プロジェクトに参加し、東日本大震災についての実情を見聞きする機会を得たことをうれしく思います。被災地を訪れ、被災者の話を聞き、津波を体験した彼らを見て本当に胸が痛みま

した。そしてまた、その困難を乗り越えていく心の強さに尊敬の念を抱きました。日本の人々は本当に素晴らしい人たちで、清潔できちんとした環境で生活している人々だと思いました。

今回、私が学んだことは、

1. 被災したどの地域に行っても、非常口があったこと。
2. 田老地区に津波が来たとき、高台に逃げるための避難階段が作られていたこと。
3. 被災地に行くと、みな復興のために一生懸命頑張っている。

ということです。また、親しい人を震災で亡くした人々を見て本当に胸が痛みました。

被災地域を訪れた時に、代々語り継がれてきた言葉があり、後の世代の人々に注意をうながしていることを知りました。帰国後、ここで見たたり聞いたたりした実情を多くの人々に伝えること待ちきれなく思っています。日本の人々は、津波でどんなに多くの人や家、財産を失っても、お互いに助け合い、前を向いてがんばっています。(モンゴル B グループ)

- 被災地を訪問して素晴らしいと感じたことは日本の人々の心の強さである。ビデオを通じて津波の現実を見て、その恐ろしさを実感した。地震のときはすぐに高台に避難し、そこで1時間から2時間は待機したのちに降りてくるようにという先祖代々の言い伝えがある。そのために高台に上がるための避難路が作られていた。また私たちが滞在した宿舎にはすべて非常口の位置が示されていた。盛岡市に滞在中、震度 2 の地震があり、生まれて初めての体験であったが、今まで感じたことのない不安な気持ちになった。

家を失った人々を仮設住宅から公営住宅に移住させるなど復興のための活動が続いている。津波に襲われた地域に住んでいた人々を高台に移住させる計画がある。

また津波到達点を結んだライン上に桜を植樹するなどボランティア団体の活動が行われている。

自然災害は本当に危険なものである。災害はいつ、どこで起こるか分からないため、それぞれが自分を守るための備えをしていることが重要である。(モンゴル B グループ)



KIZUNA 帰国後アクションプラン作成シート

I. 来日前の東日本大震災に関する知識

1. 原子力発電所の事故によって放射能の被害が環境だけではなく、動物や人間にまで及んだ。
2. 津波による被害は大変大きかった。日本列島が海に沈む危険性がある。
3. 多数の日本人は海外へ避難している。

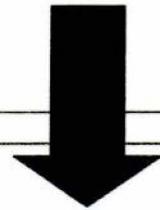
II. 被災地プログラムでの気づいたこと、学んだこと

1. インフラ面が充実し発展した国。
2. 日本人が親切で、お互い尊敬しながら接している。
3. 津波の被害にあった地区で復興活動が懸命に行われている。
4. 津波で家を無くした5万世帯が現在住む場所が確保された。
5. 放射能の被害の理解が正しくなかった。
6. 日本国民は震災について正確な情報を世界中に発信してほしいと望んでいる。なぜかという、風評被害により日本経済や社会への影が大きいからだ。



I. 来日前の東日本大震災に関する知識

日本を襲った災害についてはメディアやインターネット、日本に住む親戚らから聞いていた。震災当時はモンゴルのみならず、世界全体に衝撃を与えたが、災害に関する情報はなかった。また、1, 2 か所の町村が被害を受けたのだと思っていた。社会経済的にも大きな被害を受けたことについての簡単な情報を得ていた。



II. 被災地プログラムでの気づいたこと、学んだこと

被災地を訪れて、思ったことは、非常口や避難経路、防潮堤などは想像していたものよりもしっかりした、強固なものであった。建物や構造物の構造や建設技術は非常に優れたものであり、信頼に足るものであると思われたが、実際には被害を被ってしまった。被災地の方々の話を聞き、津波が襲ったときに撮影した映像を見て、津波被害が想像を絶する恐ろしいものであることを理解し、被災者の方々の講話を聞き、人々の心の奥底にある悲しみや苦しみを感じた。それがいかに大きな構造物や頑強な防災設備であっても自然の前では人間というものがいかに微力なものであるかを理解し、他者を思いやる気持ちや人を信じる気持ちの大切さを心から理解した。これまでの短期間の復興の様子から日本人の責任感の強さ、勤勉さ、心の強さ、決して負けない人々であるが分かる。私たちが以前に得ていた情報は決して十分なものではなかったことを理解した。



